光

第五十四輯

大正十五年六月

◆取りかへす力……西田天香

◆懺悔の生活……岩崎武夫

同人　懺悔報恩の奉仕者

祈願　不二の光明によれる生活

費用　供養されたる淨財

◆一燈園生活と禁酒主義……松浦有志太郎

◆筑紫夜話(その三)……柳原舜祐

◆流るゝ水に記録す……松下吉衛

一燈園・宣光社

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くは常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戯三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとよく言辭の擧げ得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

取りかへす力

西田天香

私のおいてもらふ燈影小塾は、比叡山とさしむかひである。さすがに平安の帝都を守護した勅願の山だけあつて、どこやらに威嚴がある。朝おきて洗面し、東を見ればすぐ眼に入る。無意識にはやおがんで居る。比叡山は塾のものには自然の本尊様である。しらず〳〵に淨められてゐることとおびたゞしい。

殊に私には強く感じるものがある。それは此山について色々のことを見もし、また聞きもしたからである。昔、傳教大師が、帝都の鬼門を潔める爲めに、二十四歳の壯氣を澄まし、『あのくたら三みやく三菩提の佛だちわがたつそまにめようがあらせたまへ』と詠みたもうて、この秀峰に分け登り、今の根本中堂の下にあたる谷あひで、一本の靈木を羅漢達から渡されながら、『われら久しく御身を待てり』と護國弘道の大事を囑まれたもうたといふ樣なゆかしい傳説や、只見れば一個の山であるから、疲れた足で小石を蹴りながら、手に持つステツキで、罪もない樹々の枝をしばきなどして歩く人には、何の神韻も靈氣も感ぜずに通らうが、命がけでおがんでゆく眞魂の人には、一めぐり羊腸七里の此山が、全く九品の淨土であつたり、金胎兩部の大曼陀羅であつたであらうと信ぜられることや、傳教、

慈覺、元三の三巨匠の祈りを込められたるをはじめとし、弘法といひ法然といひ親鸞といひ、さては日蓮榮西などの諸聖達が、何れも此山を修證の道場となし給ひしことなどを思ふとき、限りなくなつかしく、またしたはれて、私の心には、全くまばゆくおがめるのである。

二十餘年も昔のことであるが、誰れかと共に比叡山に登つて、その頂上の四明ケ嶽から京都を見下ろしたことがある。つい足の下に十萬戸の古都が展望される。布を流した様な加茂川をさしはさんで、區劃整然たる古い都市。三方を圍こむ山は蒼く、四時の景色は鮮かである。そこには何の不純もなく衝突もなくまた反逆もない。

遙かに東寺の五重塔、更らに遠く愛宕山、間々に嵯峨もお室も見える。金閣寺を麓に抱いた衣笠山のやさしい姿を北へ上ると、牛若丸の荒修行で有名な鞍馬貴船の峰となる。あでやかな東山は、その寢たる姿を横のみ見せて、清水寺の伽藍も塔も眺めに入らず。智恩院の巨鐘はよしや撞くとも、響きは恐らくうら山に遮ぎられて、この比叡の頂きには及ばざるべし、よく見つむれば三條の大橋、之れをはさみて七八條の同じ長さの橋も見える。中央に位する舊御所が、恐れ多くも禁苑共に鳥瞰されるが、さすがに大地の底より湧き出た樣な嚴肅さをみなぎらせて、京もまばゆき一幅の大曼陀羅である。聞けば聖德太子は、桓武定都の前二百年に、此處こそ王城の地となるべしと豫言されて、周圍に一切藏經を分布埋藏されたることがあるとか。何にもせよ佳い景色。宗教的で幽雅で、美しい落付いた都である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

四明ヶ嶽から見下ろした感じを書きながら、いつかうつとり山上の人となつて、一帶の風光に見惚れてしまうたが、私のいひたい事はこうである。

この美しい曼陀羅の都のうちに約五拾萬の人が住んでゐるとして、此内幾割淨土に居ると觀じてゐよう？

とおもうたことについてゞある。

ぽかつと四明ヶ嶽から觀おろしてゐれば、たとへ疏水へ幾人かの人が飛込んで自殺を企てたとしても、其人の心の内容に觸れぬ限り、蛙が古池へ飛び込み、花が枝を辭して根に歸りするのと、何のちがひもあるではなうて、たゞ遊戲三昧の一片であるまいか。また刑務所からひかれて、裁判所へ審かれにゆく未決囚も、紅燈綠酒のもと、金の鎖りで、節操と魂を裂かれて泣くいたわしい女性も、さては詐欺も泥棒もあらゆる十惡の業も、見ようによれば其まゝ寂滅のすがた、ありのまゝの成佛相でもあらう。けれども當事者にしては、中々淨土でもなく、遊戲三昧處のさわぎでない。『碧々と澄む疏水の流れ』などゝ、ブク〳〵水を呑みながら感歎しても居られまい。司法權の獨立を象徵する立派な裁判所も、罪あるものには針のむしろ劍の壁で、殿堂のやうな歌舞練場も閨怨の人妻には、嫉妬の炎をもやす薪ともならう。借りた金が返せぬ苦みや、試驗にパッスせなかつた悶え、約した愛人に裏切られた淋しさや、失敗した人、首になつて家庭生活の不安など、大小輕重を數へたてたら、恐らくは五十萬人中の大部分が、曼陀羅中の遊戲三昧ではあるまいと思ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

内容にかゝわらずに、實相を觀れば、極樂の莊嚴であるものが、執着して迷へば、地獄の思ひをしてゐると云ふ此妙なあらわれが、昔から聖哲の心を種々に苦めてゐるようでもあり、また現に一般の人類の人生觀をまごつかせてゐるとおもはれる。低級な人生觀にも理と情との矛盾がざらにある。『なんとなろぞい。』『人の疝氣を頭痛にするな。』『若い時は二度は無い。』『食つて寢てチョンだよ。』などは悟つた顏する方であるが、さて自分の問題になると案外弱音をはくが多い。『その弱音も實相の一つであるからそのまゝでよいよ。』となぐさめても中々勝手に苦んで泣く。他處の息子などの出征の時には『萬歳々々』と元氣よくねぎらうた或る悟つた愛國者が、自分の長男の後備が引出されるやうになつた時、ショゲかへつて元氣を失つたり、いつかど自信があつて人の腹をいつもきつた醫者さんでも、自分の女房の腹は、人にも切開させなかつたそうな。こんなおもしろい話しがある。

親類の談事には、いつでも臨んで、最後の裁斷役をつとめる悟つた或る老人があつた。酸いも甘いも知つて思慮深いので、親類の若者も皆頭を下げて言ふことを聞くことになつてゐた。處がその老人の相續むすこが、どうした事か金を浪費し出して止めどがない。老人が如何に聖賢の道や世間の理を說いて、懸命にさとしてもきゝめがない。已むなく、皆若輩なれど親類をよせあつめて會議をひらいた。

『お前方の知ろ通り、うちの息子はもうだめだ。おれの說諭も糠に針、とめどがない、おまへだちの智慧を借りたいものだ。』

何ごとも此老人の一喝にあうて『ハイハイ』とまかり下ろ若輩の親類達は顏を見合せて何とも云はぬ。『どうちやの？』『どうしたものかれ？』とせかれるので、一人の若者、代表的といふわけでもないが、となり同志と眼くばせしながら、きまりわるそうに問ひ出した。

『おぢさん。このまゝほつておきなさろとどうなりますか。』

『長くつゞいた古い此家がつぶれてしまうにきまつてゐる。』

『家と太郎さんとどちらが大切ですか？』

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

「それはいふまでもない家が大切ぢや。お前逹にも常に云ひきかせてゐる通り。」
「それぢや、太郎さんを勘當したらどうですか。」
「それはよく分つてゐるのぢや。」
「ではそうなさつたら。」
「それはよくわかつてゐる…がれ。それが出來ないので、それでおまへだちをよんで聞いてゐるのぢや。」
「…………」

若者はたがひに顏を見合せてだまつてしまつた。殘つた冷たい茶をすゝつたり、ふたゝび腕をくみなをしたり、ニヤリと笑つたものもあつた。

おもしろい物語りである。『煩惱卽菩提』とたやすく口には說くけれど、中々自分にそうはなれず。『柳は綠、花は紅』と見臺たゝいても、かくし妻の衣裳の拂ひのたしにはならぬ。娑婆卽寂光土は、どうしたら自分のものとなつて、大自在を得られるものか?。

他の人に說く時だけや、口だけの辨慶で落付けぬものは、自分の時と實際とにも強くなければならぬ。自分と實際とに強くなれたものは、今度は逆に、他の人には强がらず、又口の人より禱りの人にならねばならぬ筈である。茲に一燈園生活が産れてくる。

『生活をかへなくてもよいではないか?』といふ人がある。一通りはそうである。どのやうな生活も皆實相をはなれてはゐないから。けれども多くは、無雜作にかくいふ人ほど自分の時には弱音を吐く。『儲けてつかふのがなんでわるい』などゝ、實用的でもないのに自動車に乘りまわすが、差引いて澤

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

山の借金が出來ても、車を曳いて人を乘せる勇氣はない。或人は一燈園生活を逆境の時にすゝめられて、『身分相應といふことがある』と眞面目に答へたそうであるが、借金の時の身分相應なら、借金のない一燈園より、もつと下に居らねばならぬことにもなる。ありあまる人の生活は穴勝ちかへねばならぬことはないが、その生活が完全に許されてゐるかどうかは、しらべて見ねばならぬかも知れぬ。許されてゐるか否かをしらべるのは中々容易でないやうだが、第一、すべて己れのものでないとあやまりはて、第二、己れはその日の正直なはたらきで活き、第三、家人も正直にはたらかせ（小兒も正しく遊ばせ、老人も正しくくつろがせ、病人も正しく養生させ）て、第四、殘れるものをおひかりの名によつて預るとき、（借りは拂ひ生産するものは生産し、殘れるものは一枚の反古をも大切にまづ許されてゐるに近からう。玆から一燈園生活と（己れが無一物にてはたらく時）宣光社經營（さわりのないものを預つて正直に扱ふ時）とがはじまつて、共におひかりに許された生活となる。

おひかりのものは一切の正しい人のものであるからこれを私人から奪はれるのだと信ずるとき、之れを防ぐ事の出來る外、己れのものゝ奪ひ合は許されまい、道場又は人のお役にもたゝうとする大きな家は、たとへ一私人の名であつても、人がわるくは云はぬものなり。公園の大なるは喜ばれ、忠實な公人の尊敬されるのも無理はない。けれ共、同じやうな言葉で、己れの身勝手を辯護して、許されない生活をしては相すまないので、一度び赤裸々に（すべてを預けて）なつて路頭にたち、そこから働き、更らに一段その受けるものをも潔める爲めに、生存競爭にならないものからいたゞくのが一燈園の托鉢生活である。（是は別にくわしい説明を要するのであるが、托鉢生活はおひかりに養はれる

のでなければなりません。菩提心の發露から財物を供養するものは、またそれ以上のものを惠まれる。是は節約又は不自然がなくなるからです。）『生活をかへる』のでなくて『許されてゐるかをしらべて見る』のである。そうして自分の根氣だけに、そのしらべを一度深めて見る時に、無一物の托鉢となるのである。次ぎにその內容で財物を預るのであるが、それはいくら澤山のものを預らうとも同じことであつて、さきの持ち方（許されないかも知れぬ）とは、雲泥のちがひであるのである。

若しも悉く許されての生活狀態になるなれば、比叡山の頂上から、眺め下ろした京都市は一幅の大曼陀羅で、その內容も共に莊嚴された淨土である。煩悶、爭奪、詐欺、婬蕩、疾病、慘死、などは決してあらうはずはなく、かゝる心の餘裕は直ちに他のなやみに同情が出來て、決して外强內弱の口辨慶とならぬ。此時如何なるものも眼にさわることなく、年にさからう響はない。いつのまにか貧民とその貧乏町はなくなつて、唯物史觀も一つの哲學だけに止まつて、今の樣な物質運動にもならず、資本主義なども姿を消して强いて名づければ『光本主義』『一切主義』『相即不離主義』『眞自在主義』『白道主義』といふ樣なものに歸るのであらう。私は玆に歸るといふが、元始に歸るのでもなく、渾沌に歸るのでもない。我執のはづれたありのまゝ（本來の面目）に歸るのである。如來とか本末究竟とか云ふ字も能く落付く。思無邪無妄念の世界に歸るのである。私の符牒で云へば『天華香洞』に歸るのである。

天華香洞に歸つては、物質とか精神とかの區別心もない。區別はあつても心がない。心がなければ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

區別もあるに限つてゐない。差別卽平等の語は古くさいが嚴かである。

此間熊本縣の水俣で、日本窒素肥料株式會社の工場を見た。硫酸安母尼亞を製するに二つの式があつて、一つは强い電氣で空氣のみより製出するのと、一つはそれに石灰を加へて作り出すのと二つであるが、いづれも空氣を酸素と水素に分ける必要がある。それには空氣を極度に壓搾せねばならぬ。專門でないから詳かには知れないけれ共、普通大氣を、その溫度壓力に比して、體積凡七百五十分ノ一まで壓搾すると『液體空氣』となるさうである。その『液體空氣』を見てきたのであるが非常に面白い。兎に角、一つのパイプから、その液體空氣がどう〳〵と流れて出る。パイプ(鐵)の周圍は時ならぬ雪が綿でつゝんだやうに見えてゐる。液體空氣は攝氏零度以下百七十度であつて極度の冷さであるからである。試みに杓子にくんで、コップにつぐ。上面が大氣に還元するまでは液體として水の樣に動いてゐる。ゴムの細いパイプを入れてすぐに出せば、シャッキラコになつてゐる。勿論折ればすぐに折れる。草を同じく入れて出せば、同樣に手で振れば薄い破璃のやうになつて粉細になる。攝氏零度以下百七十度だもの、たまつたものでない。私の玆にいひたいのは、その液體空氣は、あざやかに『物質卽精神』『平等卽差別』をそこに見せてゐることである。杓子にくんでコンクリの下敷に落すと、落ちる間にすでに煙のやうに消え失せる。たしかに杓子の中には流動體としてあるが、あければすぐに消えて還元する。どちらが元か末かも定めがたいが、瞬間にその二つの現象が見える。一つが眞か二つが眞か。まことに茫然としてみつめさす。幾度かくみ幾度か流して見ても、私の興味はつきないのである。微妙なるかな液體空氣。人の眼の如何にもたよりなさが分る。只に眼のみでなく心も

またたよりない。水が昇つて雲となり、雨となつてふつてくるのも同じであれども、今眼の前に、手の先きに、有かと思へは無、無かと見れば有である樣を見るときに、我等の思慮分別のたよりなさが明らかに知れる。そうして液體空氣それ自身は、液體と流れたり氣體と散じたりしてゐる樣だが、本來一つで又空であるらしい。勿論それ自身に分別心はないだろう。同じ狀態で、太陽はかゞやき地球は動き、米は育ち綿も實り、人も產れて死んでゆく。およそ一切のものが、同じことでまた永久であるとすれば、又是、本來一つで同時に空であるとなる。（今こんなことを書いたり分別したりしてゐるのも、囚はれない限り本來一つで又空であるべきである。）さればいよ〳〵差別卽平等は明かに知れる。液體は同時に氣體、縱は同時に又橫、又囚はれない限り物質は同時に精神、人は卽佛である。所謂、『卷けば一密にかくれ、のべれば六合ともなる』のである。前後と假りに定めたとても、又本來空だと高をくゝつて扱へばよく、それで家も建てられ子をも產めてゆき、眼ばたきするまほどの人生五十年の生涯もさら〳〵とゆけるとおもふ。否反つて今よりもつと立派なよい自然の生活が吃度生れてきそうだが、一たびその分別心に囚はれるとすぐ、此密嚴無相の極樂は、破れて十惡の地獄となる。いや足るとか足らぬとか、勝つとかまけるとか、活きる死ぬるとかさわぎ出し、苦の娑婆、ゆきつまつた世の中と云ふことになる。

どうやら今の文明は囚はれてゐるらしい。液體なりとか氣體なりとかに、このなりと決定する處に病源があるまいか。物質なり精神なりと、かく囚はれて決定する上に建てられた文明は、どうしても往きつまる運命を持つ。あらゆる研究恐らくはどこ迄いつても、是れでよいとはきまるまい。思想は

常にかわり科學も常に動搖（發明々々といへども一つの發明が次ぎの發明でこわれるとすれば次ぎの分をも合せて動搖である）する。あまりに分別心に囚はれ、うぬぼれ、權威を持たうとした爲めに、つまらぬものをよいもの〻やうに思はせたようだ。何事もそんなに決めきれるものでないことに氣をつけて、その本來の大自然の前に謙遜と敬虔な體度をもつてゐたなれば、今の樣に驕慢な人心と、復雜にして偏重な文明とは產れなかつたであらうと思はれる。

天華香洞はきめきらない。自體は空で又一つである。因緣によつて色々のものとなつて現はれて出る。それに我々はへりくだる。復雜のゆきつまりが、簡單な一燈園生活を生み出させ、預る事を試さ〻れて宣光社の經營ともなつて現はれる。必要なときといつでも消える。故に囚はれないことだけをふみはずしてはならぬ。物質とか精神とかの區別心がなくても、その二つを決して排斥しない。囚はれないでも人生はある。否囚はれないほど、天下國家は安泰になり、正しい文化は建つてゆき、人類の生活は豐かに自由にそうしておごそかになつてゆくとおもふ。

かように一物も加へず、又一物をも減さないで、そのま〻極樂であるものが、囚はれて地獄となつてゐる爲めに、それを取りかへさうとする自然のはたらきが、おひかりの生涯（一燈園または宣光社）とあらはれたのである。是は必らずしもかく縱にはつきり獨立したもの〻みでなく、橫に囚はれた家庭生活や產業生活にお り込めねばならぬ。橫にお り込んでゆくことは、縱に獨立することに比して決

して劣るものではない。又量の大きな仕事でなければならぬことはない。どのやうな小さい事からでも、囚はれぬことから出たなら、取りかへす力になる。

私は茲に最も小さい事から起る大きな力を、二三あげて見ることにします。

光友の先輩に某といふ人がある。ある時の物語りに

此間ふとしたことから、子供に女中をさんづけに呼ばす事にしましたが、只それだけのことが、色々のおもしろい結果を產み出してゐます。三人の小供をよびまして、

『さあ、今日からな。女中さんをよびすてになさるなや。お梅……と云はないでお梅さんといひなさい。あなたもね、およし……といはないでね。およしさんと云ふのです。御ほうびをあげますから。おさうさんも云ひますよ。ね、よろしいか。さんをつける子はごほうび。幾日たつてもさんをつけない子は落第ですよ。よろしいか。』

といひつけました。處が始めは中々面倒らしかつたのですが、段々になれてきまして、此頃は大かたさんをつけるやうになりました。おもしろい事は、さんをつけますと、あとの言葉が、それに相當したやさしい言葉でつゞく事です。『お梅がおこりさらしたよ』が、『お梅さんがおこりましたよ』となり、『およしがうそをつきさらす』が、『およしさんがうそをつきました』となり、それからそれへと日當の言葉がやさしくなつたに驚きました。女中の申すのをきいてゐますと、だゞをこねられても、さん付によばれて見ると、少しも腹が立たないそうです。自然小供にやさしくあたる。それで小供がよけいなつくと云ふ工合に努力を用ひずに、よくなつてゆく。此頃は女中の出入もないやうになり、長くつゞいてくれますが、たつたさんをつけるとつけないとで、こうも樣子がかわるものかと驚かされたことでした。處が私は小供のやうにゆかないで、時々困つたことがあつた。始めの内、茶を云ひ付けやうとしたときに、さんをつけるがきまりわるくて、とうど、よびかれ半日のまずに晝をかきました。又あるとき同じくよびかねて、手紙を自分にポストに入れにゆきました。小供との約束を守る爲めに、此頃はもうなれてきて、なだらかに出ますが、自分もやはりそれだけやわらかになつたことと思ひます。妙なものです。

只さんをつけるだけのことから、此樣に家庭がやわらいでゆく。子供さんが扱ひにくうてひまとる女中が澤山あるが、雇ふ側も本人も、經濟的にも精神的にも少なからぬ損害である。女中の氣のきつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

い爲めに、それを召使ふ主婦が神經衰弱になることもきく。夫人の精神的亢奮が、家庭全體の能率をそぐこともよくきくことであるが、さんをつけること位から、どの位おひかりの世界がひろまつてゆくか知れないとも云へる。

ある女子専門學校に講演にいつた時、二人の娘と一人の若い婦人に托鉢をしてもらうた。始めは小使さんまで『何だ、きまぐれにやつてゐるな。』とひやかし氣持。通りがゝりに見た生徒さん方も、エプロンつけた三人の婦人が、しめやかな氣持で硝子を拭いてゐる位に、何の興味をひくはずはない、處が私が校長さんに紹介されて講壇に立ち、懺悔の生活の眞髓を、語りつゞけるその間に、『今朝程から校庭の草を取り、硝子を拭かしてもらうてゐた三人の女性は、立派な家庭の娘と若夫人でありますが修行の爲めによせてもらうたのです』と話しの證據にさしはさんで、『自から懺悔の心もちで、先づ手を下すことなくて、多くは巧言不行に終り勝ちになることを自分達は恐れます』と話しをむすんで壇を下りました。すると校長さんは同じ壇上にすつと立つて非常に感激した面持ちで、次の如くに話された。

『皆さんと一しよに、尊い懺悔の生活のもようを天香さんより聽かしてもらひ非常に感激いたしました。校庭の前面の運動會のさわがしい音響も、少しも耳にさわらないまでに、一心にひきつけられてお話をきゝました。皆さんにかわつて天香さんにお禮を申すと共に、私の正直な感想を懺悔させてもらひます。此懺悔の心こそ天香さんへの一番よいお禮と思ひます。

皆さん、實は今朝程、校舎の教室を見まわりましたが、音楽室に數臺あるピアノが皆ふたが開い

たまゝあつては、たまつたものでありませぬ。大方皆様自分のもちものであつたなら、きつとこうしてはおきなさるまい。學校の物である爲めに等閑にするといふ心持は、はづかしいことであります。氣をつけさすやうにと、それを受持の先生に申しておきました。けれ共只今天香さんのお話しと、今朝から堪念に校庭の草むしりと硝子ふきをして居られし三人の女性が、共々立派な家庭の人で立派な教育をうけた人ときいた時、この御講演が、只のお話しでなくて、常にまづ實行されてゐることで、頼まれて己むなくなさる講演であると知れて私は恥づかしくなりました。なぜにピアノの開いてあつたのを、自分がすぐに手を下して閉めなかつたのか。先生に云ひ、先生がまた生徒に云ふといふ事よりも、まづ自分の不德をおわびの心で、自から手を下して閉めなかつたのが、それが私は恥づかしかつたのである。こらへて下さい。皆様をせめる前に先づ私をせめねばならなかつたのです………』

私は校長さんの、此意外な謙遜にして眞劍な挨拶に、あべこべに引きつけられた。不意に私の心身は一段と緊張して、靜かに三百數十人の女生徒さんと他の先生方を眺めたが、一種の電氣に打たれたかの樣子、眼ばたき一つせずに校長先生を見つめて、涙ぐんで居た方も澤山あつた樣に見受けたのである。なんと強い力でありませぬか。ピアノをお閉めなさいとごんな大きな聲で叱かつても、恐らくは此懺悔の言葉の百分の一もひゞかぬだらう。此女學校の生徒さん方は全國よりあつまつてゐられ、卒業後は多數は高等女學校の先生になる方。此感激を移して數多き女性にうゑてもらうたら、半日のかよわい女性の托鉢が、此校長先生の懺悔を通じて、いかに大きな仕事であつたか。親のはたらいた

汗の學資を、無雜作に費して、それで姪奔な事をもする學生方もあるときけば、かうして懺悔の禱りは尊いことであるとおもふ。

かゝる小さいことのそれでも、地獄を極樂に引きかへす力はある。千萬の大軍で大陸を征服したとて、只地獄の業と修羅の相を增すばかりである。懺悔の心は囚はれし執念を離脱せしめる力がある。囚はれ心をなくするならば、此まゝ脚下に天國淨土は實現する。只に比叡山上より見下ろした京の都のそれのみでなく、世界が密嚴淨土となる。ラヂオが出來て驚いたであらうが、何程幸福になつたかは疑問である。硫酸安モニアが空中から取れるその科學と大きな仕組には、驚異を感じもしようが、田を刈つたあとに、ゲンゲの種を蒔いておけばそれでも硫安の代りになつてはる〳〵金をかけて硫安を運搬せいでも同じことだそうな。ゲンゲの爲めに二毛作が出來ぬといふても、此頃の麥作は手間にもあたらぬので、彼是比較してゲンゲ草に一毛作を讓るのが有利だといふ人もある。今でも簡單な方法で事は辯じてゆくのである。幾ら大きな組織でくふうしても宇宙のものは一つも增さず又一つも減りはせぬ。澤山儲けるといふことが、澤山混雜させてゐる事もおびたゞしい。

故人になられた田尻博士に聞いたことがある。『鑛山々々と云つて儲かる樣にいふけれど、日本の銅山は山林田畠其他に與へる損害を差ひけば、大方二朱位によりまわるまい』。どこからコンナ算盤が立つかは知らないけれ共、これもおもしろい見方である。

もう少し大きく見れば恐らく二朱にもあたらず大きな損であるかもしれぬ。いつやら戰後の跡始末

にこまつて軍艦を澤山太平洋のどこかで、金をかけて沈めたではないか。軍縮の爲めに廢艦になつた幾十かの艦船などもすたりものにするのに金をかけてゐる。これだけの金屬を掘り出す爲めには、また動かす爲めの燃料を掘るには、實に莫大な犧牲を拂ふてゐるのである。積んで崩す爲めに人は怨み悶え病み死ぬものだといふたら云ひ過ぎだらうか。餘り引合つた事をしてゐないらしい。

こんなことになるのは何の爲めか。只一つの分別心に囚はれるからである。その囚はれから解放されて、天國淨土に歸らするには、囚はれない生活を、縱と横とに現出すべきである。それには量の大小を云ふべきでない。あるものは皆さわりがないのであるから、小さい事からでも天國を作り出すやうに人の眼に小さくても神樣の眼には大きい。理想の世界は脚下にある。はしなく追ひ求むる處にはない。地獄より極樂へ取りかへす力は囚はれ心を除くことである。之れを除く爲めには懺悔の生活が最必要となるのである。

つねに、さんげの心を、生かしてゆくには、たえず、かへりみて、あまへぬやう、なれぬやうに、せねばならぬ。一定の、仕事につくと、それが、おろそかになる、きらひがあり、また、その仕事は、できると、かんばんを、だすことにも、なりやすいであらう、なにも、できないもので、あることを、つねに、表明してゐるのが、さんげの心には、かなふやうに思へる。それには、時々に求められることを、なんなり、できるだけ、させてもらひ、あとは、自分の、さんげ心にかなふことに、かへつてをるのが、一ばんよいやうである。

——高橋正雄氏著「道を求めて」より——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

懺悔の生活

——一燈園の解説としての——

岩橋武夫

ゲーテの言葉に『我れ學ぶ事を欲せず生きん事を欲す』と云ふのがありますが、此れは知識の過剰に苦しんでゐる近代文明の弱點を鋭く指摘したものであると考へます。『生きる事』と『學ぶ事』が一つにならない處に近代人の悶えがあります。生活と知的發達とがいつの間にか歩調を亂して、恰も歯車と歯車の間に砂の這入つた機械の如く不調和と矛盾が存在するを見る事は悲しい事實であります。我々は近代に於て多くの驚く可き文化的事業を完成しましたが、其の半面、生活苦、現實苦に惱まされる事の甚しいのも亦近代を外にして見出し難きを知る時、深く反省の必要を痛感いたします。さらば此の二元的な二重人格的な生活の見惡さから如何にして脱却し得るのでせうか。此の問題に就て省察を廻らし乍ら、此處に今夕諸君の前に新しい一方法を提供し共に熟考してみたいと思ふのであります。

今、司會者の御説明があつた如く私のサブゼクトは一燈園の註釋と、その懺悔の生活『" Life of Repentance : Interpretation of 'Itto-en'. "』と云ふのでありますが、先づ一燈園と云ふ字義の由來から申

さねばなりません。一は『ワン』、燈は『ライト』、園は『ガーデン』で、一燈園とは英譯すれば『ワン・ライト・ガーデン』となります、即ち燈が一つほのぼのと東洋の寺か神社の神々しい庭の暗を照らしてゐると云つた有様を想像して下さらば、其處に何かの趣が湧いて參ります。日本の神社に詣でた人はよく記憶されてゐる事ですが、かう云つた燈をかゝげるに相應しいランターン『燈籠』が石で出來ていくつも並んでゐる事です。古い都である日本の京都や奈良へ行かれた外國の遊覽客は、風光の美と共にかう云つた石燈籠や其の他東洋風の古代建築に深い興味をさそはれる事は疑ひも無い事實であります。此の様な背景を想像し乍ら今一度ワン・ライト・ガーデンの有する意味を味はつて下さい。其處に謙遜にして瀟洒な宗敎的情緒があふれ出るではありませんか。日本に古くから傳はる諺に『貧者の一燈、富者の萬燈』と云ふのがありますが、其の意義は丁度キリストが宮の賽錢箱を前にして貧しい孀の投げ入れた一錢が無限な價値を持つてゐる事に就て弟子達を敎へたあの時の言葉と同じ內容であります。今は既に故人である綱島梁川と云ふ信仰の氣高いクリスチャンが明治の時代に住んでゐました。此の人の宗敎的感化は日本の思想界に色んな種を蒔いたのでありますが、其の人が曾て東京のある新聞に『一燈錄』と題して隨筆を發表された事があります。其の當時(今から見れば既に二十有餘年前の昔です)此の一燈園の創設者である西田天香氏が自分の創めた新らしい宗敎團體を表明するに相應しい名もあれかしと心ひそかに求めてゐられた矢先きだつたので、此の『一燈』と云ふ名が梁川氏の快諾を得て採用される事になつたのであります。

扨今一つ本問題には入る序說として、私は是非此の一燈園とクエーカー敎との間に橫たはる關係に

就て申さねばなりません。其の敎義や思想に於ける共通點は後程私の説明せんとする處であります。が、玆には美しいエピソードを申上度いと思ひます。拙著『動き行く墓場』と云ふのが東京で出版されつひ五六日前私の手に屆きました。此れはあの盲詩人ミルトンが書いた最後の叙事詩『サムソンの歎き』に用ひられてゐる暗黑のエキスプレツションを借り來つて題名としたもので、私の失明生活、其の懊惱、宗敎への轉機など內外生活の懺悔錄でありますが、其の跋文として西田天香氏が意味深い一文を寄せられてあるのを見て非常に嬉しく思つたのであります。其の跋中に天香氏は一燈園――岩橋――ブレイルスフォードと云ふホーミユラを作つて居られますが其れは一燈園と私、更に私の親友である神戸ジャパン・クロニクルのゼ・エ・ブレイルスフォード氏更にブレイルスフォード氏と天香氏並に一燈園との濃い連なりを云ひ現はしたものであります。司會者のラツドラム博士や其の他本夕此處に御來聽されてゐる方々の內には旣に此の友人ブレイルスフォード氏に就て熟知されてゐる方もありますが今一應簡單に説明申上げませう。

同氏は大洋州ニユージーランドの人で夙にクエーカー信徒としての堅い信念を持ち歐洲大亂中は非戰論の主張者として何處迄もキリストの敎へに從ひ武器を拒絕し爲に二年間牢獄の人となり同夫人と共に隨分苦境の經驗をされたのであります。氏は東洋方面に於ける文明、社界、思想問題の批評家として甚だ慧眼の所有者であります。戰後卽ち今を去る三年前、私がまだ神戸の學窓にゐた頃日本へ來訪されたのでありました。私は當時國際語エスペラントを母校の講堂で講義してゐたのでしたが、B氏はエスペランチストであつたが爲早速私を訪ね吳れ爾來日を重ぬるに伴れ信仰を深めたのでありま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

す。國際語の問題のみならず思想上宗教上の諸點に於て彼我の間には人種の差別も忘れたなつかしい一新境が打ち建てられたのでした。私はいつも冒頭に述べたゲーテの言葉を忘れ得ぬ一人でありましたが故にB氏と逢ひ其の夫人と友誼を厚うするに及んで其の內なる生活と外なる生活とが全く相一致してゐる點に於て敬服措くあたはざるものがあつたのであります。特に同氏がクエーカーの信徒であると云ふ事を知つた時、かねがねロマンローランの著作や其の他一二の書物を通じて知つてゐる徹底した平和主義としてのクエーカー教の事が今更の如く强い印象を私の胸に刻むのでした。玆にB氏と私、更にクエーカーとの關係が芽を吹き出したのであります。

其の後一年過ぎて秋の中旬私と同氏は京都へ講演の爲め參つた事がありました。歸途歷史的な此の古都の神社佛閣を歷訪し乍ら最後に淸水と云ふ古い寺の高臺に座して色々な人生問題宗教上の話題に耽りました。空には中秋の月あかるく足下には虫の音すだき周圍には色映えた紅葉が夜目にも其れと見えるばかり紅の色を染めてゐました。何んの機會からであつたかは忘れましたが、兎に角話題が日本現代の社會の上に戻つた時、私が今夕話さうとする一燈園の事を云ひ出しました。するとB氏は私の言葉を止め『其れは西田天香と云ふ人が打ち建てた新らしい宗教運動ではないか?』と尋ねるのでした。私は此のエトランゼーから斯くの如き明瞭な質問を得て驚きもし且つ流石はと着眼の尋常ならざるを敬服しました。同氏の話に依るとニユージーランドにゐた頃、貴國マンチエスターから發行されてゐる『マンチエスター・ガーディアン』に『ジャパニーズ・トルストイ西田天香氏』と云ふ題目の下に同氏に關する記事の出てゐる事を讀み、かねがね自分の考へもし空想もした生活が此の人に依つ

て具體化されてある事を見出し、遂に我が知己を得たるの感深きものあつたと云ふのであります。私の妻が曾て同園に於て道を求め且つ最初同園の厚意に依り補助者として私の家へ參り其れから其れへと私に取つても色んな意味に於て生活の變化が始まり且つ又天香氏との友誼も深まると云つた時代にあつたのでありますから、早速私を通してブレイルスフォード氏と天香氏との深い交りが結ばれました。最初B氏を伴なつて天香氏を訪ねたのは其の年の冬風の强いやゝもすると白いものが降り出しさうな日の午後でした。粗末な黑衣を着た天香氏と眞摯なB氏とが對談の模樣を想像して下さい。(丁度から云つた說明に相應しい天香氏、B氏、私共の寫眞や其他の書き物などを持ち合せてゐますから後程御覽下されば幸ひです）私は通譯し乍ら思はず身の締るのを感じました。愉快な事は私の拙い通譯を通して二の魂がたゞ一つに溶け合つて行く事です。其處には東西の別なく言語の障壁もありません。ロマンローランの云つた如く『思想の王國は空にあり』で四の目は私の見えない處で心のどん底迄見拔く樣な銳い輝きを以て我が意を得たりと云はぬばかり微笑もし頷づき合ひもするのでした。其れから數回B氏と天香氏は會見を重ねB氏はジャパンクロニクルに度々天香氏に關する記事をかゝげましたのみならず翌年には更に長い一燈園と天香氏に關する論文をアメリカの雜誌に書かん事を企て及ばず乍ら私が其の材料や飜譯の助けをしたのでありました。丁度私が故國を去る二ケ月以前に其れが完成されアメリカの方へ送られましたが、其後詳報に接しません爲め其れが如何なる雜誌であるか茲に申上る事は出來ません。B氏は其の長い論文のタイトルを『日本の豫言者西田天香氏』とつけてゐました。何れかの雜誌に於て將來發表される事と思ひますが、其の節は御披見なさる樣御す

ゝめいたします。斯く考へ來る時今私がクエーカー諸君の集會に臨み一燈園の問題に就て御靜聽を煩す所以も自ら明瞭となり掬す可き興味も亦淺からざるものあるを信ずるのであります。いよ〳〵これから本問題に這入りませう。

マンチエスターガーデイアンが云へる『日本のトルストイ西田天香氏』とは穿つた言葉でありますが私は最近に於てトルストイと云ふよりも『日本のソクラテス』と云つた方が一層相應しい樣な心持がいたします。と云ふのは冒頭に述べたゲーテの言葉の如くソクラテスにあつては思想が生活であり生活が思想であつて此の點に於ていトルストイ以上に天香氏と相符合するものが多いからであります。論者又曰く『天香氏は日本の聖フランシスである』と。さうです聖フランシスと云ふのも相應しい表現方です。然し私は尙ソクラテスにたとへる方が最適當と思ひます。其の故は天香氏の創められた一燈園の運動は單なる宗教の分野に於ける活動に止まらず其れと並行的に政治、經濟を含む社會の問題を取り扱ふ分野をも持つてゐるからであります。（此の方面を宣光社運動と申しまして後に論究いたす積りであります）即ち一燈園の運動には純粹の精神問題と物質問題の兩者が恰も靈肉の分ち得べからざる關係の如く一つとなつて示現されてゐるからであります。ソクラテスに於ける人生最高の目的は有德にして且つ有益なる人物を涵養するに有りましたが天香氏の理想とする宗教觀の對象にも同じものがある樣であります。即ち精神、物質兩界が相對等の關係に於てのみ保持せられ在來の宗教的運動や物質的運動が其の一つを否定する事に依つて他を力說すると云ふが如き偏頗な態度とは聊か其の趣きを異にする處あるを以てであります。故に私の見る處に於ては天香氏をソクラテスと比

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

べる時に最も興味深い類似を發見するのであります。さり乍ら純正なる宗教的雰圍氣に於ては聖フランシスに比べるも亦當を得たものと云はねばなりません。思想全體の傾向が文明、社會などの諸問題を宗教的良心を以て嚴肅に批判する點に於てはトルストイに比するも亦可でありませう。然し率直に申せば天香氏はトルストイの如く學究の背景を持たず又聖フランシスの如く神祕なる僧院に立籠ると云つた中世風の宗教的情緒のみの所有者でもありません。故にどうしても天香氏と比ぶ可きはあの粗衣をまとひ素足にて處と人とを選ばず對話を持つて百般の人生問題を論究しいさゝかの報酬を得る事をも肯じなかつたソクラテスと比較する事が最も要を得たものと感ずるのであります。

天香氏が一燈園を創設されたのは前にも說いた如く今を去る廿有餘年以前の事で私の見聞する範圍に於ては決して最初から斯かる宗教團體の發生を豫想されてゐた譯ではありません。天香氏は己の人生、宗教に對する必然の解決策として所謂る一燈園式の生活法をたゞ一人歩み出されたのに過ぎなかつたのであります。元來一燈園の宗教思想や其の信條に就て研究せんとする場合には此れを生み出した天香氏自身の生活態度と思想から始めねばなりません。卽ち一燈園の歷史は天香氏の歷史であります。然し今夕は一燈園のアウトラインを諸君の前に提供するのが私の目的でありますから、此の歷史的方面卽ち天香氏の個人的傳記の詳述は他日の事に讓り玆には必要な範圍に於ける同氏の宗教思想の分脈を辿つて見樣と思ふ次第であります。(此處に御來聽のミスロップが管理されてゐるマレイハウスの女子大學生寄宿舍に於て昨年クリスマス私は天香氏と一燈園に就て小さな講演をいたしましたが其の節は天香氏の生涯を主として一燈園を客として話したのであります。今夕のは其の逆の方面からの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

觀察です。）天香氏は色んな社會的職業や地位に立たれた人で其の半生は實際家、實業家として送られたのであります。或は北海道に於て開墾事業に從事された事もありますが要するに此れ等の舊生活は天香氏に大なる懷疑と煩悶とを植ゑ附ける原因でありました。私は此の天香氏の內に起つた懷疑を內的革命と呼びます。其れは三つの要素から成り立つてゐます。

一、國家的人種的爭鬪（政治及法律問題）

二、生活の爭鬪（經濟及社會問題）

三、內なる爭鬪（精神的宗敎的問題）

一二を合すれば此れを外なる爭鬪と呼び、三に對照する事が出來ませう。之れを要するに天香氏の內的革命は人間の存在が個人的にも社會國家的にも內外兩面から見て爭鬪の上に打ち建てられ從つて不安であり暗黑であり無意義である處に始まつてゐるのであります。最初天香氏を捕へた爭鬪の諸概念中最も目立つものは第二の生きる爲の爭鬪でありました。天香氏は此方面の解決を得る可く其の煩悶時代に於て色んな宗敎の門戶を叩き其の敎へをあをがれたのでありましたが、彼等の答へる處は大同小異にして氏の熾烈なる內的要求を滿足させる事が出來ませんでした。氏は殆ど絕望の狀態にまで差し迫り遂に故鄉の美しい琵琶湖畔にある愛染堂と云ふ小祠に端坐瞑想し『戰はずして生き得る道ありとせば生かしめよ、若し然らずんば我が命を奪ひ給へ』と絕食して祈る事三日三夜でありました。（私は昨年故國を出發の前に同氏の案內を得てブレイルスフォード氏夫妻と親しく此の祈りの場所を見ましたが、誠に強い印象を受けた次第で其れは丁度あのジョン・ノックスのさゝやかな祈りの部

屋にも比ぶ可き物であります。」三日目の朝祈れる天香氏の耳に何處からとも無く赤ん坊の泣き聲が聞えました。其の泣き聲は暫らくして聞えなくなりましたが其の時突如として天香氏の心靈を照らす光明が輝いたのであります。即ち無心な赤ん坊は乳を欲して泣く其の片一方には乳を張らした母親が呑んで貰ふ事を待つてゐる。其れ故に泣くと直ぐ乳は與へられる。其處には極く自然で爭闘の影も無い。神は人間を造つた、萬物を造つた其の全能にして叡智なる計畫に疎漏のある可き筈が無い。丁度無心な赤ん坊の聲を上げて泣く如く我々も心から神に祈る時自然の乳房は我々を待つてゐて必ずや爭闘の無い方法を以て要求を滿足さして呉れるに違ひ無い。かう云つた信念が天香氏を前へ〳〵と動かしました。曾て氏の讀まれた『我が宗敎』中にトルストイが敎へて居る『一度死ねよ』との聲が心の内に響いたのも此の時でありました。其處から天香氏の新らしい宗敎生活が始まつたのでありま す。親類も朋友も氏の態度の急變を見て狂人と呼び愚人と嘲りました。『爭闘の無い生活』此れが天香氏の基調であります。其の故を以て天香氏は爭闘の原因となる可き一切を放擲して仕舞はれました、そして殘る一身を神に捧げひたすら懺悔の生活をいそしまれたのであります。私はよく日本の社會が各方面から猜疑と驚異の眼を以てかう云つた天香氏の新らしい生活の道を冷やかに批評し非難するのを見聞しましたが其れは何時も豫言者を迎える世間の態度であるとは云へ痛ましい感を覺えさせられました。然しかう云つた非難も侮蔑も天香氏の信念を動かすにはあまりに小さい物でありました。默々として歩んだ生活體驗には傍觀者の到底理解し得られぬ深い宗敎上の喜悦と心靈の調和とがあつたのであります。乞食の如く黒衣一枚をまとつた同氏の姿は故郷を去つて日本の舊都京都に現

はれ其處彼處からの需めに應じて最も賤しい人々の忌避する樣な仕事に何等の報酬をも要求する事なく祈りを以て奉仕されたのであります。禮を失したたとへかは知りませんが便所の掃除の如きは最も同氏の從事された仕事の一つでありました。貴國に於ては水掃式になつてゐて極めて清潔でありますが日本に於ては其の設備無き爲一定の期間中汚穢物を保存しなければならず、從て不潔に流れ易く動もすると惡息を放ち勝ちで之れを始終清潔にする事は甚だ衞生上から見ても有意義な事でありますが、場所が場所丈に怠り勝ちになります。其の掃除を天香氏が好んで奉仕されたのでありました。此れ等に關する委しい消息はまた他日の事として更に話題を進めて行きませう。『爭鬪無き生活』はイエスのなした山上の垂訓の大眼目であり、トルストイが說ける無抵抗主義の理想でありますが、其れを明らかに生きた體驗として生活の上に證明して行つたのは天香氏の一燈園托鉢であります。托鉢とは先き程から申してゐるサービス『奉仕』に相當する佛敎語でありましてブレイルスフォード氏は之れをフリーサービス(自由奉仕)と飜譯して居られますが、其の方が原語の意味を現はす上に於て妥當であります。兎に角かうした無報酬の托鉢を祈りを以て續けると云ふ事は色んな大きい結果を伴なつて來ましたが、然し茲に報酬を要求しない天香氏が食物の糧をいかにして得られたかとの疑念を諸君が御持ちであるかとも考へ一言いたして置きます。報酬を要求しないとは云へ若し托鉢を受けた人及び家庭にあつて感謝の念と共に捧げる食物乃至物質は最小の限度に於て之れを、又感謝の念と共に受け入れると云ふ事は神の許し給ふた唯一の方法であると云ふのが氏の信念であります。何んとなれば其處には爭鬪が無く只兩者の間に感謝があるのみでありますから。斯くする內に生活の共鳴者が出來て來

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ました。或は同じ様な生活形式をとる者さへ現はれて參りました。托鉢は托鉢者を救ふばかりで無く托鉢を受けてゐる者、其の家庭、其の周圍の社會に救ひの種を蒔いて行くからして天香氏の祈りに始まつた生活の茅生えは各所に成長を始めたのであります。言葉の上にあらずして生活の上に燃えた宗敎の火は頑なゝ我慾に滿ちた現代の社會を徐々に燒きつくさずには置きませんでした。天香氏の內に來た內的革命はかうして社會を動かす無抵抗の革命となつて行きつゝあるのであります。斯くして天香氏の周圍には何時の間にか多くの求道者の團體が形造られました。ある篤信の婦人は其れ等の人々の爲にとて修道の家を建てました。此の團體を命名して一燈園と云ふのであります。天香氏はすゝめらるゝがまゝに自分の言動を書き記した一書を公にされました。名附けて『懺悔の生活』と申しますが、同書が近々四五年の間に九萬部の發行を見たと云ふ事實に照しても如何に天香氏と一燈園の生活が日本の現今社會に重大な影響を及ぼしつゝあるかを御想像下さるに難くはないと考へます。今は京都集のみならず東京、名古屋、神戶、長野、栃木、三重、福岡、其の他の著名な地方に於ては『光の友の集り』なる名稱の許に一燈園の求道者が集會を開き或は東京に於ける各種の社會事業其の他機關雜誌の發行等各方面に目覺ましい發達を示し、今や一燈園の宗敎運動は其の組織化の時代には入つたの感があります。クエーカーの集りが『ソサイティー・オブ・フレンズ』(友の集り)と呼ばれて居るのも一燈園の地方的集會が『光の友の集り』と呼ばれてゐるに比べ合すとき偶然か故意か其の名稱が餘りに類似して居るのに驚くではありませんか。

一燈園の宗敎思想並に其の信條の根本は之れを『光明祈願』五ヶ條の內にまとめられてあります

が、其の用語は佛教のテクニック多くして之れを其のまゝ英譯するのは當を得たものと云ふ事が出來ません。私は曾てブレイルスフォード氏に之れをキリスト教のテクニックに轉譯して其の內意を傳へたのでありますが、茲には更に其れを分解し骨子のみを申上げてみたいと思ひます。

a　光明――一燈園は一宗派を立てず一宗派に偏らずして古今聖者の精神的偉業を仰ぎ各宗教の眞髓を禮拜するものであります。此の意味に於てペルシャに發生したバハイズムと共通の要素を持つて居ります。但し一燈園の立場から申せば所謂神或は佛と云ふ命題のかはりに暫定とし光明（光とも云ふ）と云ふ言辭を使用するのでありますが、キリスト教の立場から云へば之れを神と呼んで毫も差し支へないのであります。要するに神佛と云ひ光明と云ふも宇宙の創造者全能にして全知なる本質の存在を指すのでありますから。此の故に一燈園には各種の宗教信者が集つて各々の立場から道心を研いて居るのであります。クリスチャンもあれば各種の佛教信者も亦神道信者と云つた風に

b　懺悔の托鉢――一燈園の見地からすれば社會一般の罪惡苦患は之れ一切己れの責任であると云ふ信念に始まり引いては自己の罪惡懺悔と云ふ徹底した宗教的情念を形成するのであります。茲に無抵抗主義の根底が横たはり消極的にして又積極的なる宗教上の活力も孚まれるのであります。一切を我が罪なりとして懺悔する處に大なる肯定が始まり其處から新生活が起るのであります。此の大觀した懺悔の下座は必然の結果としてやむにやまれぬ托鉢を招來するのであります。托鉢とは懺悔、感謝、祈禱を以て何等の報酬を期待する事なく自由なる奉仕を個人又は團體に捧

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

げる事であります。

c 精神的一燈園(天華香洞)——一燈園本來の姿は無所有にして無我、私慾よりの解脫、崇高なる祈禱を通し宇宙の本質たる光明(或は神或は佛)との靈的交涉に依る自我の再生、其れを基調とする倫理生活を意味するのであります。此の靈的認識を天華香洞と申しますが其れは畢竟スピリチュアルエキスピリエンスを象徵したものと云ふ事が出來るでせう。

d 物質的一燈園(宣光社)——一燈園は本質に於て飽迄前記cであらねばなりませんが若し許された財貨或は爭鬪なくして與へられたる物質がありとせば、其れを光明(或は神佛)の名に於て暫く預り、整理經營の任に當るのであります。換言すれば一燈園本來の精神に基き社會、經濟、政治、法律の諸問題を解決し絕對の平和を打建て樣とする大願望であります。

e 地上の樂園(神の國)——以上の信念願望を基として人類一般の大祈願たる永遠の樂園を地上に將來せんが爲に人種國民國家の差別を超越し共同の事業に携はる事、斯くする事に依つて一個人の內外生活が一步々々完成すると同時に一社會一國家の其れが完成されて行くと云ふ無限の歡喜を感じ引いては光明(或は神佛)との融合一致と云ふ最高の體驗に迄達する事、斯くする事に依つて各宗教の創設者の遺した偉業が成就されると云ふ確信、此れ實に人類共同の大事業大祈願たる所以であります。

カーライルは『サーターリザルタス』の內に於て有名な言葉を書き遺して居ります。卽ち『人生の分數は分子の增加に依つてよりも分母の減少に依る方遙に大なる增加を見る』若し分母が極端に減

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

少され零の域に迄達したならば分子の數如何に係はらず所謂人生の分數は其の答が無限大となるではありませんか。天香氏はカーライルを讀まれた譯ではありませんが、其の思想の祕訣を分母の零即ち物慾、我慾の絕對的否定に於て無中の有を悟得されたのであります。天香氏は好んで〇を書かれる。〇は即ち圓滿の象徵であると共に無の象徵でもあります。無にして有、しかも圓滿之れ氏の思想を形作る三階程であらうかと思ひます。玆に東洋的な瞑想直觀の色彩が濃く現はれて居ります。

我が友ブレイルスフォード氏は此の點をよく理解して呉れました。其の故に東洋的な一燈園もB氏の目には明かなものとして映つたのでありました。B氏は更に快心の笑を持つて私に告げた事は一燈園の思想が社會一切の罪惡缺陷を己の責任なりとして深く懺悔する處に基調を置くと云ふ根本原理は聽てクエーカー敎の依つて以て基礎槪念とする處のものであると云ふ點であります。斯く考へ來る時純粹なる東洋的宗敎運動が西洋の其れと共通の分子を多分に含んでゐると云ふ事は、彼我を比較して見る私にとつて又諸君にとつても此の上なき興味の中心ではありませんか。かなり長時間にわたつて申上げましたが語らんとする處あまりに多く語る可き言葉餘りに拙きをうらむの念甚だ深いものがあります。終りに西田天香氏の友人として一燈園とは淺からぬ關係を持つて居られる東京の早稻田大學敎授中桐確太郎氏が私に寄せられた一燈園に關する槪說の一文を飜譯して御讀みいたしませう。此れは前に申上げたブレイルスフォード氏の長い論文の內に揭載す可く私が寄稿を中桐氏に依賴いたしたものであります。拙譯を御忍び下さつて最後に今暫らく御靜聽下さらん事を希望いたします。

一燈園生活に就きて

私は西田天香氏が新生活に立たれて以來、今日に至るまで、殆んど二十年間、氏及び一燈園生活に、隔意なき親しみを繼續して來たものでありますが故に、此度の御來示に特殊の義務を感じたのであります。

此頃、天香氏の缺點につきて、かれこれと申す人も出てまゐりましたが、神そのものでない限り、何人か完全であり得ませう。氏にも其の舊生活の薫習が幾多殘存してをるに係らず、その人格と、その創められたる生活樣式とが、決してつまらぬものではなく、少くも日本の思想界に相當の影響を與へ得るものであることは、天香氏の著『懺悔の生活』が既に八萬部以上を賣盡し、且つ京都の一燈園に投じ來るもの每日幾人かづゝあるといふ事實が、よく證明してをると思ひます。

凡そ宗敎的經驗をなせる者が、何等かの程度と形式とに於て靈覺する所によれば、宇宙の眞相は此儘、天國淨土である。然れどもまた飜て、現實の世相を見れば、此世は依然たる婆婆であり、憂き世であり、地獄の相をさへ現はしてをる。何が故に此の如き矛盾が存するか。その因緣をたどりて、畢竟するに其罪は自から負はねばならぬとする時、こゝに懺悔の念が生ずるのである。此の懺悔の念によりて如何にもして此世に天國淨土を開顯せんが爲に、獻身的に努力すること、これ卽ち懺悔奉仕である。

蓋し天國淨土といふも、その宗敎的賦彩莊嚴を除き去りて、その骨髓だけをいふならば、それは卽ち愛の基礎の上に建てられたる自由の國土に外ならぬ。自由とは各自禀賦の性能を活動發展せし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

むるの自由であるが、稟賦の性能なるものは、愛の中にはごくまれ、愛の内に發達し、愛の間に活動することによりて有意義を感せらるゝのである。故に天國淨土を建立することに於て、最も大切なるものは愛を此世に生起せしむることである。然らば、愛を此世に生起せしむる道は如何。

蓋し愛とは、自他一體たるの事實を靈覺する所に生ずるものである（と私は信ずる）。此靈覺を邪魔するものは各自の我執である。我執は所有慾と結びつきて其勢を最もたくましうするものである。乃ち先づ自己從來の執着の罪を懺悔し、一切の所有を捨て、本來の無相に歸り（而して此くすることが、此世が此儘天國淨土であるといふ眞相を悟得する大圓覺を開くことである）。他の需めに應じて、報酬を要求することなしに、奉仕の誠を致すことを努めねばならぬ。蓋し奉仕は、被奉仕者をして其の要求を滿足せしめつゝ、感謝の念のうちに、自然にその我執を破らしめ、奉仕者をしては、自からの罣碍を破ることによりて自他一體を體驗せしめ、且つ道心を滿足せしむることによりて天的の聖悅を享けしめ、かくして自他の間に聖愛を生ぜしめ、以て天國淨土の基礎を作ることになるのである。

此の如く無所有にして、無報酬なる奉仕に從ふことを愛の托鉢とも名けてをる。所謂一燈園同人とは此の如き『祈りの生活』をなしつゝある一團をいふのである。

現今京都鹿ケ谷の一燈園を中心とせる此の教團の組織につきては尙ほ改造を施すを要するものがあると同時に、一燈園同人の祈願は、更に此の懺悔奉仕の生活を普通經常の職業中に活現せんことを期するにある。これ所謂俗諦の中にありて俗諦を成就せんとするもので、名づけて宣光社機能と

申してをるのは是であるが、此の方面に於ける祈の形を如何にすべきか、今後の研究と實驗とに待たねばならぬ。なほ此れ等一燈園生活の理論的説明の一端に資せせんが爲に、余は曾て『光明祈願にそへて』といふ小冊子を公けにしたことがある。御參考に供せられ、且つ御批正をたまはらば幸甚である。

西田天香氏は目下滿鮮方面を巡歷し各所に於て有益な講演をされてゐますが同氏の講演振りは極めて平民的であのキリストが好んで用ひられた樣なアレゴリーを巧にあやつり自身の生きた生活體驗に結び着けると云つた特色があります。かう云つたアレゴリーの一つが私の頭に今浮びました。夏の暑い日だつたと記憶してゐます、天香氏は私の書齋に座つて机の上に載つてゐる茶碗をいぢくり乍らかう云はれました、『人間と云ふものは厄介な癖が有つて……さう〳〵茶碗でたとへれば之れを割つて仕舞つて後で大騷ぎをすることですな。科學者とか思想家とか賢い人を呼んで來て割れたかけらを拾ひ集め一生懸命になつて元の茶碗を造らへ樣とする。私は學問が無いからそんな面倒な造へ方は分らないが私に言はせると繼合せることも成る程結構だが、なぜ割らない用心をしないだらう……………其れが今の文明社會の其れではありませんか。』

味へば味ふ意味の多い言葉です。ゲーテは云つた『我れ學ぶ事を欲せず生きん事を欲す。』實に天香氏は『眞生活に生きてゐる人』であります。此の二十世紀にしかも東洋の日本に於て文明の謎を說かうと生活の新らしい方法を我々の前に提供してゐる日本のトルストイ、聖フランシス、否ソクラテスであります。(終り)

(千九百二十六年一月三十一日夜スコットランド、エヂンバラ市クエーカー敎徒「友の集り」に於ける講演の反譯)

一燈園生活と禁酒主義

松浦有志太郎

個樣な問題で何かかいてとの天香さんからの御話がありましたから、拙劣ながら何かかいて見樣と思ひますが、何も此と云ふ腹案がある譯ではありません、只々此から思ひ浮ぶものを不順序に書きつけて見ませう。

飲酒と云ふ事は奢恣贅澤の張本であると私はかねて思ふて居ます。殊に一方に生活難だとか國民の常食の米が足らないとか心配されたり叫ばれて居る世の中に、大切な米を潰ぶして無用有害の酒を造り之を飲むと云ふ事は此れ位放恣驕慢な態度はありますまい。此は丁度一燈園の生活主義と背中合せの事かと思ひます。一燈園生活は凡て謙讓で働いて其の與へられた報酬さえ自ら受けず總て之を御光にさゝげて極めて儉素の生活を徹底的に營んで行かるゝのに、飲酒主義の人は自分の腕で得た金錢を自分が飲まうがゼイタクしようが勝手だと云ふ思想を抱くものが多く、加之ならず自己の働いたよりもより以上の報酬を要求して酒の飲代にせなくては足りない程の始末になり親しき家族の飢餓をさえも顧みずして一己の私慾に耽ける者さえ少くない。私は此等のことを考へ合せて飲酒主義は丁度一燈園生活と正反對の生活だと思ひます。

近代の流行事實として小作人と地主の爭議は著いものゝ一つでありますが何方からも自己の慾を言ひはりて足らぬ〳〵と言ひ合ひましては

解決の圓滿につく筈がない樣に思はれます。然るに玆に一燈園主義を持つて行つて心持ちよく快刀亂痲を斷つ的に裁決されて雙方とも喜んだ例話は幾つか承はりて居ります。而して地主が先づ自己の飲酒を止めて其思で小作料を負けたといふのがあり、すると其に感じて小作人も亦禁酒して勤勉となり其生活が始めて安定を得るに至つたと云ふ事があります。何れにしても飲酒の爲に多大の浪費を敢てして居る事を思へば彼れ此れと部割を言ひ爭ふ事は甚だ矛盾の話であります。いくら小作料を減じて貰うても酒を飲んで居ては足り樣筈がなく地主も亦飲酒の私慾に耽ける樣で、多々益々貪る心になりたがるのも止むを得ぬ事であらう。

一燈園生活は生活難から全然解放された新生活であると思ひます。それと同じ樣に絕對禁酒に徹底したる生活に於ては現代の所謂生活難抔は問題にならぬ事であらうと思ひます。一事が萬事の譬の如く飲酒が無用の浪費たる事を感得したる禁酒主義者は追つ附け喫烟の有害無益である事も直に悟ります。時間の浪費をも切に厭ふ樣になります。故に生活難に襲はるゝ樣な間隙を見せない樣に自然と生活が充實し緊張して參る樣です。以上種々の點に於て一燈園生活と禁酒主義生活との間に自然の步調の一致を認めらるゝと思ひます。

飲酒が種々の罪惡の根本となるばかりでなく飲酒その事が不善の行爲である事は歷史の事實に就て又現在目の前の事實に就て精察すると明かなる事である。釋尊は數千年の昔に於て詳細に之を敎へられた。而して二拾世紀の科學智識の研究は之を具體的に證明して吳れてをるのである、身體髮膚の末と雖も徒らに毀傷するは不孝である不仁である。今猶イラズの如き毒藥を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

人に飲ませ又は自ら服するならば人は皆その殺人的行爲に驚き其非行を尤むるであらう。人に酒を飲ませ又は自ら酒を飲む事は毫も其と選ぶ所はない。只急性殺人と慢性殺人との差あるのみである。コレラ菌を人に飲ませて殺すのと、結核菌を人に飲ませて殺すとの差あるのみである。

只々一回酒を飲んだとて其人が直に由々しき惡事を遂行する事は滅多にあるまい。併し一度が二度になり三度になりて其間に知らず〱惡事が遂行され健康が破ぶらるゝのである。而して其本人は必ずしも其を知らない。惡事千里で其の飲酒の惡風は直に千萬人に傳染流行して處々に種々の悲劇慘劇を演出するのである。

實際に惡事を遂行する事は一回の飲酒にては容易にない樣に見ゆるけれども、それは保證は出來ない、よし又惡事を遂行せぬとしても精神的には一杯の酒によりて已に必ず正覺を失ふものでありて五官六覺益々其の官能の傾斜を强ゐられて卽ち心已に不正に陷る事を免れないのである。語を換へて言へば一杯の酒も人に必ず錯覺を與ふるものである。人が酒を甘しとなすのは其錯覺に浸たるが爲である。寒い時に寒さを忘れ疲れた時に疲れが醫せられたと思ひ、又憂を掃ふ玉箒と喜ぶ。皆なこれ錯覺の作用である。正覺を滅して自らを欺くものである。卽ち一杯の酒に已に自らを欺き又世を欺くの行爲を敢てして居るのである。もし錯覺を貪るのでないと言ふならば其人は水を飲んで十分滿足すべきである。

一燈園生活者及び禁酒主義者の渇は水を以て十分滿足さす事が出來る。併し飲酒家の渇は酒でなくては治まらない。（終）

○本號表紙題字　は文學博士矢吹慶輝氏が英國博物館所藏より撮影せられたる燉煌出土の維摩詰經跋文（西紀六三七、唐の貞觀十一年、高昌麴氏の某淸信女が先亡現存の追福益算に資せんがために所寫せしめし由來を記せるもの）よりいたゞきたり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

筑紫夜話（その三）

柳原舜祐

愚かなる人

昔或る一人の愚かなる人が子供と二人で、驢馬をつれて町に急いで居つたところが、一人の婦人が向ふからやつて來て、折角自分達の驢馬を持ちながら、塵にまみれて歩くとは、何と云ふ馬鹿な人達だらう、と云つたので、それもさうだと思つて、子供を乘らせて暫く進んで行くと、數人の年寄がやつて來て、若いものが乘つて年寄を歩かすとはけしからん、と云つた。それもさうだと思つて、子供をおろして、自分が乘つた。今度は又何人かの婦人達がやつて來て、小さいものを歩かして、大きなものが馬に乘るとは穩かでない、と云つたので、それもさうだと思つて、今度は二人とも乘つて仕舞つた。すると又一人の男がやつて來て、小さな馬に二人も乘るとはあんまり可愛相だと罵つた。そこで親子は途方に暮れて、遂に驢馬の四足を括つて、棒で荷つて行つた。そして或る橋の上まで來ると、大勢の人達が向ふからやつて來て、餘りのおかしさに、聲をそろへてふき出した。さらでだに苦しさに堪へかねて居た驢馬は、俄かに大きな笑ひ聲を聞いて、びつくりしてもがき出した。そして遂に橋からころんで、河の中に落ちて死んだので、二人の親子は、詮方なく手を空うして歸つて行つた。

と云ふ話を私は大變趣味深い教訓だと思ふ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

右の人々の注意は何れも、それを一つ〳〵切り離して見れば、深い道理のあることである。又二人の親子が、人々の親切に對して、我を貫くことなく服從したと云ふことも、そのこと丈けに就いて見れば、決して惡いことではない。

けれども其の面の異るが如く、人々によつて見る所を異にする、一々の厚意に同時に從はうとすると、結局どれにも從へないことになる。

私はこの頃、さう云ふ性格の友人を、男に一人と、女に一人と持つて居て、かげながら其の友人達のために憂いて居る。そして私は常に云ふ。

私は只一つの意見をあなたに差し上げたい。それは私の意見にも從ふて下さるなと云ふことです。他人の意見を批判し且取捨して行く根本的な信念が、定つてからならば、何人の意見をきかれてもよろしいが、それ迄は、どうか只一人程、全部を任せ切る事の出來る相談相手を見つけ出して、其の人だけの指圖に從ふやうにして下さいと。そして以上の事は、意見を聞く人に取つて、大切なことであるのみならず、意見を吐く人に取つても、注意すべきことであると思ふ。獨自の個性なき人に對して、多くの名論卓説を聞かせることは、名論卓説そのものが決して惡いことではないにしても、結果はその人を迷はすだけのことになる。

親心

私は今日一人の友人の母親の訪問を受けた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

言ふことを憚るが其の友人の素行が面白くないために、友人の支辨す可くして、而も停滯せるいくらかの金を、直接友人に渡しては、又途中で消費してしまうかも知れんと云ふことを心配して、老軀を運んで態々持つて來られたのである。その母親の談話の一節。

私の家も以前から今程困つた譯でも無いのですが、主人が馴れない商賣に手を出して、まんまと失敗したために、只今では見る影も無い朝夕を送つて居ります。豆腐をひゐたり、酒の小賣をしたりして、どうにか食つては居りますもの丶、餘裕とては少しも出來て吳れません。それで豆腐の殼だけを計算以外のものとして、貯蓄して、かう云う不時の費用にあてることにいたして居ります。

其の金額は僅かに四十圓許りであつた。然しそれが豆腐の殼から集積せられた親心の結晶であることを思ふ時、私の胸は熱い涙に充ちた。

（一五・一・二九）

或日の彼女

「お菓子——！」

と云つて、私の勉强して居る机の側に、九つになる子供がやつて來た。

私は何氣なく返事を忘れて默つてた。

「飴？」

「飴なら有る」

と云つて、彼女は躍りながら、母の側にと歸つて行つた。

彼女は、飴をハンカチに包んだのを持つて居

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

たのであつたが、何か漠然と他(ほか)の菓子が欲しかつたのであらう。然しさすがに父に面して見ると、そして默つて居られて見ると、まさかさうとも云へないし、云つた所で結局貰えさうにも無かつたので、又この場合自分も飴で滿足すべきであると云ふことが、ぼんやり乍らも意識せられて、ぴよん／＼歸つて行つたのであらう。

自問自答、唯三語、それは神樣がよく私達にも經驗させて下さることのやうだ。

（一五・一・二四）

彼の女の妹

お客樣の歸られたあとの、茶碗や菓子やお布團をそのまゝにして、机にすがつてぼかんとして居たら、今年六つになつた許りの文ちやんが、

とつとと行つて布團を重ねて、茶碗と菓子とを臺所に下げて呉れた。

私の目には涙がにじんだ。子供は勤勞をいとふものではないらしい。その子供に喜んでせられる勤勞が、大人(おとな)に取つては、重い負擔になるのは何故(など)であらうか？

（一五・一・一三）

「生徒の爲めに、こちらに思うてゐることは、たとひ少しも之れを口に出さずとも、悉く生徒の方に通じてゐる」と。是れ道友、二瓶氏が、敎育上の實驗として語られたる語也。

——綱島梁川氏著寸光錄より——

流るゝ水に記録す

松下吉衛

　社會科學の一ト通りわ、學生時代からのことなので、まあ、心得てゐるともいわれよう。宗敎生活も、とにかく形だけでも、曲りなりに十年あまりわ、やつて來た。菩提心からの供養――淨財による生き方の如何に聖く尊むべきかお、宗敎生活が敎えてくれ、今、社會に渦お卷き起している勞資の爭議に、どうゆう階級がどうゆう役割お演ずべきかお、社會科學から學び、また社會運動の人々にもいろ〳〵接してその實際お見ている。が、一體、この自分わ？と、時々考えさせられる。

　この間も、停車場の人ごみのなかで、ふと肩おたゝかれたので振りかえると、學校おでゝ十何年もあわない一同窓だ。『やつぱり、君だつたか。お互に年とつたね。もう四十だ、何かやらなくてわ。』といつて、倉皇として去つた。

　あとで考えた、自分わどうだ、このまゝでいゝのか知ら？ 覇氣があり辯護士お業とするときく友わ、何かやろうとしているのだろう、と。そして寂しい氣持におそわれた。が、やがて平常に復した自分わ、惡びれずこうゆうことが出來た。――たゞせめて虔しく生かしてもらわう。いかなる場合どんな時にも、虔しさだけわ失いたくない。これが自分のようなものゝ最小限度のいのりだ。

　しかし、從來の經驗わあまりにしば〳〵この最小限度のいのりの失われがちなことお示している。これお思うと、いかな自分でも、もうとてもたまらない。

――一五•六――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

近代文化と一燈園

西田天香著　代價30錢

一燈園生活問答

松下吉衞著　代價15錢

時代苦を苦しむ

,,　代價20錢

クリスト教社會主義史

,,　代價32錢

社會問題と宗教

中桐確太郎著　近刊

購讀申込所

回光社

京都市烏丸頭下總町五

振替 大阪 59839・東京 57671

●一燈園經要　御希望の方わ實費送料22錢(2錢切手)
下記え――東京・本所・林町二ノ七八 同勞會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

鳥谷部陽太郎散文詩集

愛を歌ふ

序

別所梅之助、時枝誠之、西原和治
谷口雅春、江渡狄嶺、梅原眞隆

跋

大山順造、山本蘆葉、吉田庄七

梅原眞隆先生の序に曰く

鳥谷部さんの散文詩集は、干からびてすさんでゆくこの頃の大地における、なつかしい供養のひとつである。

鳥谷部さんはまだお眼にかゝる機會はないが、その書かれたものによつて親しみを感じてゐる一人である。いつか、しみじみと打とけて話してみたい一人である。いま、この散文詩集をよんで、いよいよ親しみふかい印象を與へられる。

鳥谷部さんは久遠の童心を見失はない人の樣に想はれる、幼きものゝうへにめぐまれた純眞をすなほに體感してゐられるから。鳥谷部さんは端的に生命をつかむ人のやうに感じられる、平凡なものゝうちに孕んだ神秘にふれてゐられるから。そして、その內感と印象を誇張もなく虛飾もなしに素描せられたこの文集にはおのづからなる氣品がある、何れの小品もしみじみと物をおもはせる。深いこゝろもちを堀りさげてゆく。

晩餐のあとなどに、紅茶でもすゝりながら讀むにふさはしい文集である。この文集はすべての人々に愛せられてよい素質をもつてゐるやうにおもふ。

—內　容—

こどもの世界……………九　章
街　頭　篇……………七　章
一人生く……………六　章
幼子禮讃……………十四章

—四六版洋裝高雅　定價六拾錢　送料六錢—

發行所　東京市外下澁谷一四五六　振替東京四八九五九　三土社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN